

記憶の再現

——杜甫「江漢」を讀む——

ウイリアム・H・ニイハウザー・Jr.

ウイスコンシンシシ大學マディソン校

淺田雅子・平田昌司譯

京都大學

杜甫が詩を作り、韓愈がエッセイを書くにあたって、たとえ一語たりとも出典のないものはない。おそらく、のちの時代の者が讀書の量が不充分であるため、韓愈や杜甫がいろいろな表現を自分で創ったと言うのである。昔の、文學作品を書ける人たちは、無数の事象をかたちにすることができた。彼らは、古人の表現を取り上げ、それを筆や紙で形にした。それは、まるで靈的な辰砂の一粒のようなものであり、鐵につけられるとそれを黄金に変えてしまうのである。(老杜作詩、退

記憶の再現 (ニイハウザー)

之作文、無一字無來處。蓋後人讀書少，故謂韓杜自作此語耳。

古之能爲文章者，眞能陶冶萬物。雖取古人之陳言入於翰墨，

如靈丹一粒，點鐵成金也。^① 黃庭堅（一〇四五—一一〇五）

「洪駒父に答える手紙 三首」

はし が き

「昔の、文學作品を書ける人たち（古之能爲文章者）」と黃庭堅がいうのは、疑いなく主に唐代の詩人たちのことをさす。これらの詩人は、初唐に存在した四千篇もの詩（六朝朝の作品三千三百篇、及び『詩』三百篇、「古詩」數百篇、そして『楚辭』を可能な限り諳んじること、仲間たちと共に有のメンタル・コーパス^②を創出していた。共鳴（resonance）、文體的借用、そして引喩（analogy）は、彼らの詩歌に容易に見てとれる。そうした状態は、黃庭堅が冒頭の一節を書いた時代——杜甫（七二一—七七〇）の死からおよそ三百年後——までに根本的に變化した。杜甫自身（現存する詩一千五百首）、そして李白（詩一千一百首）や白居易（詩三千一百首以上）が、唐代以前の詩人全てを合わせたよりも多く

の詩を作ったせいで、問題が生じてしまったのである。宋代の文人にとって、現存する全ての詩作品を唐代の先人たち同様に記憶することは、もはや不可能だった。七～八世紀の詩人共有のメンタル・コーパスは、十一世紀の詩家において選擇的メンタル・コーパスへと變わっていた。このことは、作詩、あるいは詩を讀むことに、新たな方法をもたらした。宋代の文人は、自分の好みにあわせて讀むようになったのである。たとえば黃庭堅自身は、杜甫を崇拜していた。また、新たな批評のジャンル「詩話（詩についての語り）」が興り、どういった詩を讀めばよいかを讀者たちに薦め、かつそれらの詩をどのように讀むべきかを説いた。宋代における杜甫の讀者——黃庭堅のような——は、杜甫や彼と同時代の八世紀の詩人たちが有していたような、一意的かつ包括的メンタル・コーパスを、意識に再現することはできなかつた。だからこそ、宋代の詩人たちは選擇的に讀んだのである。

今日では、こうした唐代のメンタル・コーパスを再現し、唐詩の讀みを活性化する手段を、電子テキストの利用に

よって驅使できるようになっている。われわれは、黃庭堅が「昔の、文學作品を書ける人たち」と呼んだ著者たちの作品全てを、必ずしも讀んではないだろう。さらにそれらの作品を、唐代の詩人たちのように暗誦したことも決してない。だが、コンピュータは七～八世紀に存在した「共有のメンタル・コーパス」に類似したものの再現を手助けしてくれるのだ。本稿は、唐代の讀者が同時代詩人の作品をどのように讀んでいたかを、現代の讀者がある程度まで理解しようとするとき、電子テキストで檢索した詩が手助けとなることを示す試みである。

序 論

今日われわれが唐詩を讀む方法は、どこに問題があるのだろうか？ それを述べるためには、アメリカの中國文學研究史について少し説明しておかなくてはならない。^③アメリカにおける最初期の中國研究者の多くは、外國出身者であった。具體的に言えばヨーロッパと中國の出身者である。われわれの先人は、ハンス・フランケル Hans Frankel

(ドイツ出身) やピーター・ブッドバーグ Peter Boodberg (ロシア出身) といった人びとであり、彼らはアメリカの中國文學研究の草創期に大きな影響を與えた。ただし、中國文學の分野における巨匠は、中國人であった。すなわちイエール大學およびコロンビア大學にいた夏志清 (H. Hsia)、シカゴ大學からスタンフォード大學へ移った劉若愚 James J. Y. Liu である。夏氏の『中國古典小説——批評的序説』(ニューヨーク:コロンビア大學出版局、一九五九年)^④と劉氏の『中國詩の技法』(シカゴ:シカゴ大學出版局、一九六二年)^⑤には、西洋の學習者が中國語のテキスト(物語的あるいは詩的な)をいかに讀むか手ほどきをする教科書として企畫されたという面がある。これら先驅的入門書が出現したのは一九六〇年代初めであり、それはちょうどフランス構造主義の波がアメリカ東海岸へと到達していた時期だった。中國詩をめぐる劉若愚の方法は、あつさりと舞臺を明け渡してしまう。まず高友工と梅祖麟が『ハーバード・アジア學報』に発表した創造性を秘めた諸論文^⑥へ、ついでには數々の著書や論文を通じて二十一世紀初期のアメリカ

記憶の再現(ニイハウザー)

カの學生たちの唐詩解釋に多大な影響を與えたステイブン・オウウエン Stephen Owen へ。

オウウエンの主張によれば、唐詩は、ふつう詩人の見たまま感じたままの記録である。例えば、杜甫「旅夜書懷(夜に旅して、感じたことを書く)」につき、「世界の豫兆——中國の抒情詩における意味」で、オウウエンは次のように注記する。

杜甫の言葉は、一種獨特な日記の書き込みのようなものかも知れない。ただ、濃密さや緊張感、まさにその瞬間に起こった經驗を表象したという點で、通常の日記とは異なっている。あたかも日記であるかのように、この詩は歴史的經驗の記録だということを保證してくれる。正確な時間、正確な場所、正確にながびう起きてどうなったのかは、失われて再現することはできないかも知れない。しかし、讀者は詩の描く内容の歴史的眞實性を信じ、あてにする。この詩の偉大さは、詩的創造によってではなく、ある詩人が、その瞬間・その場面に出會うことのできた幸運によって浮上

してくるのである。^⑦ (傍點は筆者)

オウウエンはこの種の詩を、ワーズワースの詩「ウエス
トミンスター橋の上にて、一八〇二年九月三日」と対照し、
ワーズワースの詩で「詩の言葉は、限りなく獨自性をもつ
歴史上のロンドンという存在に直接結びつくものではない。
なにか別のもの、テムズ川に浮かぶ船舶の數など全く意味
を持たない深みへと導いてくれるのだ。その深みはとらえ
がたく、その豊饒さは永遠に手が届かず、この都市そのも
ののように開かれたものだ」(同書十四ページ)と述べてい
る。最後に、まとめとしてオウウエンは以下の信條を示す。
「杜甫の讀者にとつて、その詩は虚構ではない。それは歴
史上の時間における經驗についての、一回性の事實として
の報告である」(同書十五ページ)。

確かにこのような讀解法が有効な唐詩は少なくないが、
優れた詩の多くはこの考へには馴染まない。この種の詩は、
高友工と梅祖麟が「想像的言語表現を支配」する「快樂原
則 (the pleasure principle)」と名づけたものに訴えかける。
本稿ではこうした優れた詩の一つ、杜甫の「江漢」が、單

なる「歴史上の時間における詩人の經驗についての事實報
告」を超えるものだとすることを論じたい。より豊かな解
釋へといざなう道しるべは、唐代の詩人が讀者を導く手が
かりとしておいた共鳴と引喩とである。このタイプの解釋
は、「澄明解釋 (a pellucid reading)」^⑧と分類することがで
きるだろう。「擴散や歪みなしに、光が最大限に透過する
ことを許す」かの如く、言葉の意味そのものを強調するの
である。引喩や引用という光が唐詩を照らすことで、作ら
れてから十三世紀以上が経過していることから豫期される
よりも、はるかに擴散や歪みの少ない像として、そのテク
ストが目に見えてくる。この種の解釋は、早くから「詩の
意味は、しばしばことばの外に表れる (意在言外)」もので
あるということを確認した傳統中國の解釋者のみならず、
チャールズ・ハートマン Charles Hartman^⑨ やグレン・ダ
ドブリッジ Glen Dudbridge^⑩ のような西洋の中國學者の著
作、さらに言うまでもなくヴァルター・ベンヤミン (一八
九二—一九四〇)、ロラン・バルト (一九二五—一九八〇) や
ウンベルト・エーコを含む近代批評家たちの評論において

提唱されてきたものである。

対象とする詩

「江漢」(長江と漢水)は、おそらく七六八年(大暦三年)の秋、杜甫が漢水を遡って都に歸れることを願いながら、夔州を發し長江を下っていたときの作である。^⑫ そうした旅は、ついに實現することはなかった。杜甫はその後の一年少々で亡くなったからである。以下に試譯を掲げる。

江漢

江漢思歸客，乾坤一腐儒。
片雲天共遠，永夜月同孤。
落日心猶壯，秋風病欲蘇。
古來存老馬，不必取長途。

Between Yangzi and Han

Midst Yangzi and Han, a sojourner longing to return
home,
Between heaven and earth a single worthless

記憶の再現(ニイハッザー)

pedant.

A streak of cloud and the sky, equally distant as am
I,

An endless night and the moon, share solitude with
me.

In the setting sun, my heart still robust.

Despite autumn winds, my sickness nearly re-
vered.

From ancient times rulers have held onto old horses
So they did not need to take the long road.

長江と漢水のあいだで、漂泊者は歸郷を待ち焦がれる
天と地の間で、一人役立たずの儒者

一すじの雲と空は、私と同じように遠く

いつまでも明けない夜と月は、私の孤獨の同伴者
日が沈む中、私の心はまだ壯健で

秋風に吹かれながらも私の病は回復しつつある
古代から君主が老馬を大切にしてきた

だから馬たちは長い道のりを行わずに済むのだ

この詩には多くの英語譯が存在するが、最も知られてい
るのはステイーブン・オウウエンのものであろう。

Yangtze and Han

At the Yangtze and the Han a voyager

longing to go home,

Between Ch'ien above and K'un below

one broken-down man of learning.

A wisp of cloud, the sky shares this distance,

Endless night, the moon an equal in solitude.

In setting sun a heart still young, still strong.

Through autumn's wind, my sickness growing better.

From ancient times they've sustained old horses

That they need not to take the long-faring road.

長江と漢水

長江と漢水で旅人は歸郷を待ちわびる

乾の下と坤の上との間、一人行き悩む文讀む男

一片の雲。空がその遠い距離を共にする終わりのない夜

月も同じく孤獨の身

日が沈む中、心はなお若く、なおたくましい

秋風に吹かれ、私の病も良くなるうとしている

古くから、ひとびとは老馬を世話してきた

だから馬たちは遠い道のを行く必要がないのだ¹³

解説の中で、オウウエンはこの詩を「寒々として厳しく
禁欲的」であり、「乾と坤は、『易經』における二つの基本
的な宇宙原理である。それは、天と地、陽と陰にはかなら
ない。讀者には空ほどに遠いのが雲なのか詩人なのかは分
からない。それは、いくつかの自己表象からなる奇妙な世
界であり、年老いた官僚を示す老馬のイメージにおいてそ
の極致に達する。かれは、いたわられるべきであつて、晩
年に至つて終わりなき旅に放り出されるべきでないのであ
る」と述べる¹⁴

さらに別の詩論の中で、オウウエンは本作品の異なる讀
みを提示する¹⁵。彼は、「江漢」について「有名な詩である
とともに、異様さをそなえ、杜甫による距離感と親密性の
独特な組み合わせによつて生氣を吹き込まれている——杜
甫もまた、居所を失つてただ獨り、並みの老馬には適さな

い環境に置かれた老馬なのである。杜甫の場合は、老いた馬とは異なり、長い旅の道程を行かなくてはならないのだ」と言っている。

オウウェンはおそらく末句の「老馬」が引喩だと示唆しているであろうが、明言してはいない。だが、私には、この引喩が、少なくとも最後の一聯、おそらくは詩全体を支配しているように思える。杜甫が引いたテキストは、『韓非子』の、管仲が主君の齊の桓公（前六八五～前六四三在位）に従って、周代初期の孤竹國へと遠征した際、自らも軍團全體も歸路を見失ったことに気づくくだりである。そこで管仲は、老馬を放して道を探させようと提案、これが功を奏し、桓公とその隨行者たちは無事に歸路を見つけたのである。管仲が、この馬を自身の桓公にとつての有用性の象徴とするつもりだったかどうかは議論の餘地がある。しかし、杜甫が尾聯において——この七六八年という年に作られたその多くの詩と同じように——自分には、なお唐王朝の將來を導く力があると主張しようとしていたことは明らかだろう。

記憶の再現（ニイハウザー）

さりながら、「老馬」のイメージは、杜甫ではさらに五篇の詩にも見え、別の可能な読みも出てくると思われる。以下、五篇を（作られた年代の順に）簡単に検討し、この點を明らかにしたい。

まず、七五四年（天寶十三載）に杜甫が作った長篇詩「橋陵詩三十韻因呈縣內諸官（睿宗皇帝の墳墓〔奉先にある〕橋陵の詩、參拜のついでに縣のすべての官僚たちに三十韻を獻げる）」である。この詩は皇帝陵や縣に對するさまざま賞賛に始まる。そして杜甫は自身の窮境を手短かに描き出す。もはや若くもないのに、なにも官僚としての地位を得ておらず、家族を養うこともできない。そこで問題になる句は、つぎのとおりである。

主人念老馬、廨署容秋螢。

As hosts you have shown concern for this old horse,
To your yamen offices you admitted an autumn fire-fly.

君たちは、主人としてこの老馬を思いやり
君たちの役所に、一匹の秋の螢を受け入れた

杜甫が自分自身を「老馬」に擬えているのは確かだが、ここで用いられた引喩は、『韓非子』で道案内をした馬ではない。家を出て道端に老馬がいるのを見た田子方が「馬が若かったときには力を使い果たさせたのに、年をとってしまえば馬を捨ててしまう。そんなことは、仁をそなえた者ならやらない（少盡其力、而老棄其身、仁者不爲也）」と評したという説話を引いたものである（この話の初出は『韓詩外傳』卷八）。言い換えるなら、杜甫は若い頃にその力を國のために使い果たしたのに、今や打ち棄てられていると感じている。意味するところは、皇帝は人間としてのやりかたで振る舞っていないということだ。

第二の詩は、「病後遇王倚飲贈歌（私の病後に知り合い、酒をくれた王倚に贈る詩）」で、これはさきの詩の三年後の七五七年、より可能性が高いのは同じく七五四年、そのいづれかの年に書かれたものである。^{①7}この詩において杜甫は、三ヶ月以上も寝たきりを強いられた重病から回復したばかりだと述べている。この間、王倚は滋養物や看護を提供してくれた。詩は、杜甫の病と王倚の援助の長い描寫を含み、

つづく詩句では王倚の行政や詩における能力を讃える。そして、杜甫は自らの回復のさまを描く。

故人情義晚誰似，令我手脚輕欲漩。

老馬爲駒信不虛，當時得意況深脊。

Of old friends who of late has shown affection like
you?
Leaving my hands and feet so light I want to whirl
about.

That "an old horse could become a colt" is not an
empty claim.

My contentment now comes all the more from your
profound care.

昔なじみの中で、近ごろ誰があなたほど好意を示してくれた
でしょう

手足がとても軽くなって、私は思い切り振り回したいのです
「老いた馬でも若駒になれる」とは、ただの言葉のあやでな
く

あなたの行き届いた氣配りゆえ、私はますます満足している

のです

この若駒となった「老馬」は、別の名句、すなわち『詩經』小雅「角弓」（『毛詩』第二三篇）の「老馬反爲駒、不顧其後（老馬は、それにもかかわらず、自分自身を若駒だと思ひ、將來どうなるかは全く顧りみない）」を踏まえている¹⁸。

この「角弓」の標準的解釋の一つは、レッグが以下のように示したところである。

良心なく、地位を求め續ける人々は、老いた馬のようだ。自身は未だ若いままだと思ひ込み、その地位にあつて要求されるであろうことを自分が成し得ないなどということは考えもしない。そうした人びとは、自らが求めているよりも高い基準で、全てのものごとを必要以上に大きな尺度で測っているに違いない。……詩全體が王の血族・姻族への冷遇に對する寓意である。この引喩は、したがつて、「江漢」における、自分は「まだ若く壯健である」という杜甫の主張を曖昧なものとしてしまふかも知れない。實際に公職につけられたとき、「要求されるであろうことを自分が成し得ないということ

記憶の再現（ニイハウザー）

を考え」なければならぬことさえ、杜甫は自覺していたかも知れない。しかし、杜甫が自分の手足は實に軽く、踊らんばかりに「思い切り振り回したい」と述べた句の直後で老馬―駒の引用をしたことで、官職への適性への不安も杜甫の意識の片隅へと追いやられてしまったであろう。詩人は新しい活力を與えられ、もう一度若駒のように元氣に跳ね回れるかのような氣分を感じているのだ。

「老馬」という表現は、「觀安西兵過赴關中待命二首（安西の部隊が、命令を待つために、關中の地へ向かうのを見る、二首）」と題された、七五九年秋、安祿山の亂のさなかに作られた詩にも現れている。この安西兵は十年以上も北方の前線に駐屯した有名な將軍李嗣業（？―七五九）に率いられていた。李嗣業は、安祿山の反亂軍から首都長安を奪還する際大いに功績を上げており、また皇室の一門でもあつた。杜甫がこの詩を書いたとき、李嗣業は相州に逆臣安慶緒（？―七六一）の鎮壓に向かう途中であつた。彼はそのすぐ後に矢にあたつて戦死する¹⁹。さて、この詩の八句のほとんどは李將軍を賛えたもので、問題の「老馬」も

はつきりと彼のことを指している。

老馬夜知道、蒼鷹饑著人。

臨危經久戰、用急始如神。

As the old horse by night knows the way,

As a falcon in hunger sticks to men.

He has faced danger, gone through lengthy battles,

But employed in this crisis we'll first understand his

divine talent.

老馬が夜でも道を知っているやうに

飢えた鷹が人びとにつき従うやうに

彼は天下の危機にあつても、長きに渡る戦の経験があり

このような火急の際に用いられてこそ、我々はその神の如き

才能を知る

杜甫は、『韓非子』の「老馬」を、李嗣業の手腕と皇帝

への貢献とを讃えるために用いているのだ。

第四の詩「有歎（ためいき）」は、七六七年の冬、「江

漢」の直前に作られた可能性がきわめて高い。當時、杜甫

はうち續く對チベットの戦いのために四川から動けずにい

た。²⁰ この詩には次のようにある。

壯心久零落、白首寄人間。

天下兵常鬥、江東客未還。

窮猿號雨雪、老馬怯關山。

武德開元際、蒼生豈重攀。

My stout-heartedness long fallen away,

This white head lodges among strangers.

Throughout the empire troops constantly in battle,

This sojourner has yet to return east of the River.

Like an exhausted gibbon I cry as snow rains down;

Like an old horse I cower before the mountain pass.

How could the common people ascend again

To those peaceful times of the Wude and Kaiyuan

reigns?

私の勇猛な心は朽ちて久しく

白髪頭のこの私は見知らぬ人々の中に留まっている

皇帝の軍が絶えず戦闘を續けており

このさすらい人は長江の東へと未だ歸っていない

疲れ果てたテナガザルのように、降りしきる雪に叫び

老いた馬のように、険しい山あいの道に身がすくむ

武徳、開元年間のような平和な時に

我々のような庶民はどうすれば立ち戻ることができようか

注釋者によつては、「老馬」は樂府の「胡馬依北風」(韃靼の馬は、北風に身を寄せる)に倣つており、つまり、北の故郷へ歸りたいと願つているのだと言ふ。この老馬はまた『韓非子』に出ていた歸路を知る馬の變形の一つでもある。この詩はそれゆゑ、當時の政治へのいささか思い切つた論評だと思われる。おそらく杜甫は、多くの讀者が氣づくであらう、自らの詩「江漢」と『詩經』の同題の先行作品(『毛詩』第二二二篇)とについて、多くの讀者が聯想するだろふことをもあてにしている。『詩經』「江漢」は、蠻族を鎮める君主の力量を讃えているので、杜甫「江漢」當時の唐の皇帝代宗(七六三〜七七九在位)がチベット人を食ひ止める力を持たないことへの、とりわけ風刺的な論評となるのだ。

第五の例は、「客堂(寄寓者の假住まゝ)」(七六六年)と題

記憶の再現(ニイハウザー)

された詩で、杜甫が長江を下る途中、まだ夔州に着いていない頃に作られた。老いた馬は、ここでも(「有嘆」と同じ)『韓非子』の「老馬」にはかならず、家への道を知り、歸りたがっている。

老馬終望雲、南雁意在北。

The old horse till the end gazes towards the clouds,

The intent of a wild goose in the south lies in the

north.

老いた馬は、最後まで雲のほうを眺めやり

南にいる雁の氣持ちは、北のかたにある

しかし、この詩は、長安へと戻れさえすれば、杜甫自身がまだ皇帝の助けとなれることを暗示して終わつてゐる。老いた馬は故郷に歸ることを願つてゐるのだが、その故郷とは首都のことであり、必ずや杜甫の官途を意味しているはずなのだ。

以上、ほぼ十五年以上に及ぶ期間に作つた五篇の詩において、繼續的に用いられている「老馬」の隱喩(metaphor)につき、杜甫がどう考へていたかを見てきた。

また、杜甫が「老馬」の引喩の範圍を、老いた馬が有効に利用される『韓非子』の説話から、老いた馬を捨てて『韓詩外傳』の物語、そして最後に老いた馬が若駒になりうるという『詩經』へとどのように變えていったかを見たところで、われわれは杜甫の「江漢」へ立ちもどろう。

こうした引喩の典故のかずかずを念頭に置くならば、「江漢」の詩はさらなる意味を帯びる。最後の二句「古來存老馬、不必取長途」の主語である「老馬」は、『韓非子』に由來する。しかし、末句の主語は、おそらく君主になる。²¹ 君主は、第七句の老いた馬を「存（守り、のこす）」する主語だろう。唐詩の尾聯に句またがり (enjambment) があるのはごく普通なのだから、君主は末句の主語にもなりうる。この読みをとるなら、老馬（杜甫）ゆえに君主は遠回りの道を行く必要がなくなり、むしろ、よりよい進路、正しい道を選ぶことができることになる。むしろ、これらの句に、杜甫における表象の用法にあらわれた、別の二つのモチーフ「老馬が若駒のようにふるまう」と「老馬は慈悲深くあつかわれねばならない」を読み取れる

可能性もある。

この尾聯にみられる、皇帝に任官を懇請するという読みは、「江漢」全篇に響きわたったり續ける。たとえば、第二句「腐儒」の引喩は、漢の高祖が學者への輕侮を示そうと、當初は隨何を「腐儒」と呼んだという逸話を思い起こさせる。とはいえ、高祖の成功のために種々の貢獻をしたと隨何が即座に指摘したので、高祖は最終的に隨何の眞價を認め、高官に任じたのだった。「江漢」の第五・第六句も、先行する詩として曹操「神龜雖壽（神聖な龜は長く生きた）」の以下の部分を思い起させる。

老驥伏櫪，志在千里。

烈士暮年，壯心不已。

An old stallion down in the stable,

His goal still a thousand miles.

An ardent warrior in his twilight years,

Hale and hearty he won't give up.

一頭の老いた牡馬が、馬小屋に伏しているが
その目指す先は、なお千マイルもかた

ひとりの意氣高い戦士が、自らのたそがれ時にも

嬰鑠として元氣にあふれ、あきらめることはない

杜甫「江漢」にみられる老馬との一體感と異ならぬやり

方で、曹操はここで自分自身を牡馬になぞらえている。

「江漢」に話を戻せば、詩中の「老馬」の引喩における複合的指示 (juxtaposition) は明らかである。三つの古典的テクストのいずれかを示すことも、あるいはすべてを同時に示すこともできる「老馬」という語は、杜甫「江漢」に見られるすあらゆる別々のイメージを統合し、共鳴という手觸りを創り出す。かくして、第一句の旅人(思歸客)が「故郷へと歸ることを願う」如く、老馬は北を向いたときに心のおののきを感じる。しかし、第二句の「腐儒(學者づらする役立たず)」が主君によつて次第に評價され報いられたのと同じように、老馬は最後に主君を家へと導く。こうしたすべてが、自らの心はまだ強く、病も癒えた(第五、六句)という杜甫の申し立てを示している。これら最後の句から、讀者は、この老馬が再び若駒になりうる——『詩經』の暗示するところを参照して——とさえ信じるか

記憶の再現(ニイハウザー)

も知れない。

結論に向けて

われわれの詩の読みによれば、杜甫は「江漢」において、さわめて樂觀的であるように思われる。この詩は、政府で任官したいという杜甫が持ち續けた願望という文脈で、最もよく理解できるだろう。詩は、ふたつの部分に分けることができる。最初の四句は、杜甫が長江を船で下るときの病み、困窮し、意氣消沈した惨めなありさまを描く。對して後半四句では、詩人が第五、六句で再び元氣を取り戻したことが見出される。杜甫は、曹操と同じように「壯心不已——あきらめることはない」。「老馬」を第七句の目的語かつ第八句の主語として讀むことも可能であるが、『韓非子』の引喩により示唆される、統語論的にも確實性の高い解釋は、「老いた馬を捨てない者たち」すなわち主君たちこそ、最後の對句全體の主語だろう。もし老いた馬の後に、ついていくなら(皇帝が、杜甫の言うことに耳を傾けるなら)、道はそのままよい政府へとつながるはずである。杜甫は、

「腐儒」と自ら責めることにより、あたかも漢の高祖が随何の眞價を看過したのと同じく、皇帝に自分が看過されていることを示唆したので。

上のような澄明解釋は、「江漢」という一篇の詩をよりよく理解させるほかに、杜甫がいかに詩を作ったかについての洞察をも可能にする。詩人は、しばしば、何かを目にして、それに對して感情が反應したことを書く（傳統的な「景／情」形式で、あたかもオウウェンが假定した「日記の書き込み」のように）。詩人が目にしたできごとは、彼のメンタル・コーパスの中から、先行する詩作品における類似の場面描寫を想起させる契機となっているように思われる。それゆえ、杜甫の詩はおそらく虚構ではないだろうが、「歴史上の時間における經驗についての、一回性の事實としての報告」以上のものなのである。引喩によって示された、先行する詩作品における類似の場面は、つぎに讀者を詩の言外の意味 (extended meaning) へと導こうと用いられた。この言外の意味を無視すると、しばしば詩人の眼目とするところを見失ってしまう。言外の意味の再現とは、「讀者

と原作者」共有の回路を使うことで、讀者が原作者の心的状態に立ち入る手段を與える」ことであり、その経路は共有のメンタル・コーパスを通してもたらされるのだ。われわれ現代の讀者にとつて、こうしたコーパスは、電子リソースを利用することで、ある程度の再現が可能である。かくて、原詩がどう作られたもので、どう讀まれるべきかを黃庭堅や傳統的な注釋者たちが論じたのと同じように、唐詩を理解することが可能になる。

この手法は、唐代の詩作において、しばしば逆テキストの考古學 (reverse textual archaeology) とも言うべきものが働いていることを前提としている。なにか詩を作るにあたって、唐代の詩人たちが過去へと（通常は、自分が讀み記憶しているテキストを通じて）至つたのは、先行するテキストに對する反響あるいは共鳴——つまり引喩——を作り出すためであった。ジェイムス・R・ハイタワー James R. Hightower は、こうした共鳴＝引喩こそ、詩の一句さらには詩全體の意味を明らかにするために解明されねばならぬものだ」と提唱する²³。實際、中國の韻文においては、繰り

返される復古の長い傳統、暗記の重視、寓意の運用に拍車をかけた抑壓的政治體制、そして「意在言外」の萌芽などゆえに、詩における共鳴は、意味を強調しやすい。これこそ、ウィリアム・エンプソンが今では古典となった『曖昧の七つの型』で「曖昧の第二の型」^②と呼んだものである。共鳴や引喩の解明は唐代の詩、散文（黃庭堅が韓愈への言及で示した）、史學文獻、あるいは唐代傳奇（グレン・グッドブリッジが、その著『李娃の物語』^③で示した）の讀解において、ひとしく有効であることが證明されている。

本稿は、唐詩の探究にあたり、杜甫の詩の一語一語がならんらかの素材に裏打ちされているという黃庭堅の主張から始めた。その同時代人でもあり歴史家でもある司馬光（一〇一九—一〇八六）の、以下のことばで締めくくるところとしよう。

いにしえの人が詩を作り、意味はことばの外に表れるという見解に高い評價を與えた。その結果、人々はそれ（「意味」をとらえる前に、「意味がことばの外にある可能性を」よく考えてみるようになった。（古

記憶の再現（ニイハウザー）

人爲詩、貴于意在言外、使人思而得之。^④

附記

本論を讀むにあたっては、注^③に挙げた、著者ニイハウザー教授（川合康三譯）「アメリカにおける中國古典詩の研究——一九六二年から一九九六年まで」を参照するのがよい。たとえば、本論が杜甫「江漢」を對象としてとりあげるに至った背景として、A. C. Grahamや梅祖麟・高友工などの先行研究が存在することも、上記の紹介から明らかになる。

註

① 『豫章黃先生集』卷十九「答洪駒父書三首」、二十三葉裏、『四部叢刊』本。

② 「譯注」メンタル・コーパス mental corpus とは、認知言語學を踏まえた概念。言語的知識とは、その人の過去の言語的經驗の記憶の集積にほかならないとする。人間の意識には、讀者あるいは聞き手として、ある言語表現を受容することに、個々の發話形式や文脈まで含めた記憶が残存する。以後、毎回言語表現（語彙・フレーズ・意味・聲の質・對話の場の状況がどういふものだったか）に出會うごとに、過去に蓄積された言語的經驗が記憶の中から呼び出される。すると、過去の蓄積と新しく出會った言語表現とがどの程度の類似性を持っているかが一般化され、同時にどこが獨創的なのが見い

知られることとなる。参考文献・John R. Taylor, *The Mental Corpus: How Language is Represented in the Mind*, Oxford University Press, 2012.

- ③ 〔譯注〕以下に言及られる研究者の學風、個々の研究成果については、ウィリアム・H・ニン・ハウザー・Jr. 著、川合康三譯「アメリカにおける中國古典詩の研究——一九六二年から一九九六年まで——第一部（上）」〔中國文學報〕第五五冊、一九九七年（「同第一部（下）」〔中國文學報〕第五六冊、一九九八年）による紹介を参照するのが便利である。

④ C. T. Hsia, *The Classic Chinese Novel: A Critical Introduction*, New York: Columbia University Press, 1959.

⑤ James J. Y. Liu, *The Art of Chinese Poetry*, Chicago: University of Chicago Press, 1962. 〔譯注〕同書の日本語譯は、劉若愚著、佐藤保譯『新しう漢詩鑑賞法』東京…大修館書店、一九七二年。

⑥ 〔譯注〕前掲のニン・ハウザー論文（川合譯）が重視しているのは、以下の三篇である。Tsu-lin Mei and Yu-kung Kao, “Tu Fu’s ‘Autumn Meditations’: An Exercise in Linguistic Criticism [杜甫の「秋興」——言語的批評の實踐]”, *Harvard Journal of Asiatic Studies* 28, pp.44-80, 1968; 1971a, idem, “Syntax, Diction, and Imagery in T’ang Poetry [「ソング」の詩の「語法」「イメージ]” *HJAS* 31, pp.51-136, 1968; idem, “Meaning, Metaphor and Allusion in T’ang

Poetry [唐詩における意味「メタファー」引論]”, *HJAS* 38, pp.281-355, 1978.

⑦ オウウエン『中國古典詩と詩學』ウイスコンシン大學出版局、一九八五年（Stephen Owen, *Traditional Chinese Poetry and Poetics* (Madison: University of Wisconsin Press, 1985) 所收の“Omen of the World, Meaning in the Chinese Lyric”, p.13を参照。

⑧ 〔譯注〕精神分析用語を轉用したものの、對して「命題的言語を支配するのが「現實原則 (the reality principle)」。Yu-kung Kao and Tsu-lin Mei, “Syntax, Diction, and Imagery in T’ang Poetry”, p.130.

⑨ 〔譯注〕Stephen Owen, “Transparencies: Reading the T’ang Lyric [透明——中國の抒情詩を讀む]”の“transparenciesと區別するため、pellucidに譯語「澄明」をあいつおぐ。

⑩ 〔譯注〕Charles Hartman の“Alienloquium: Liu Tsung-yuan’s Other Voice [異邦の語——柳宗元の別の聲]”をよむのだらう。前掲のニン・ハウザー氏による紹介（『中國文學報』第五六冊、一九九八年）の二七三頁を参照。

⑪ 〔譯注〕Glen Dudbridge は、もとオックスフォード大學教授で中國傳統口承文學、俗文學、史學史を専門とした。ここでは後述される著書『李娃の物語』による貢献をよす。

⑫ 鄧魁英・聶石樵は、この詩を七六七年秋の作とする。『杜甫選集』（上海：上海古籍出版社、一九八三年）三四五頁。

- ⑬ スティーブン・オウエン『中國詩の黄金時代—盛唐詩』イェール大學出版局、一九八一年 (Stephen Owen, *The Great Age of Chinese Poetry, the High Tang*. (New Haven: Yale University Press, 1981), pp.215-6.
- ⑭ 同上書。
- ⑮ スティーブン・オウエン・林順夫『抒情詩の生命力—後漢から唐代までの詩—におさめる「自」の完璧な鏡—(プリンストン大學出版局、一九九六年 (“The Self’s Perfect Mirror,” in Stephen Owen and Shun-fu Lin, *The Vitality of the Lyric Voice* (Princeton: Princeton University Press, 1996), 九七頁。
- ⑯ 『杜詩詳註』卷一、二二三頁「鶴注・詩云「靡宇吝秋螢」又云「荒歲兒女瘦」、當是天寶十三載、物價暴貴、人多乏食時、往見諸官而作。」(中華書局、一九七九年)
- ⑰ 『杜詩詳註』卷三、一九八頁、「鶴注・梁氏編在至德二年、觀詩云「但使殘年飽喫飯」、略不及喪亂之意。據公「秋述」云「秋、杜子臥病長安、旅況多雨、當時車馬之客、今雨不來。」又云「四十無位。」當是天寶十三年、與「素知賤子甘貧賤、酷見凍綏不足恥」之句合耳。」
- ⑱ シェームス・レット譯『中國の古典』リプリント・香港大學出版社、一九六〇年 (James Legge, *The Chinese Classics* (Rpt. Hong Kong: Hong Kong University Press, 1960, 4: 406)。
- ① 『舊唐書』卷一百九、列傳第五十九「李嗣業傳」。
- ② 『杜詩詳註』卷四、一八四二頁、「鶴注・當是大曆二年冬作。」
- ③ 高友工・梅祖麟は「老馬」が第七句の目的語かつ第八句の主語だと論じている(参照: “Syntax, Diction, and Imagery in Tang Poetry,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 31 [1971], p.57)。
- ④ この表現は下にもあった。Paula Varsano, “Immediacy and Allusion in Li Bo,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 52 (1992), p. 226.
- ⑤ Hightower, “Allusion in the Poetry of T’ao Ch’ien,” *Harvard Journal of Asiatic Studies* 31 (1971): 5-27.
- ⑥ 『譯注』「二つあるいはそれ以上の可能な意味が一つの意味の中に完全に解消される」(ウイリアム・エンブレン著、岩崎宗治譯『曖昧の七つの型(上)』岩波文庫、二〇〇六年一五三ページ)。
- ⑦ 『譯注』Glen Dudbridge, *The Tale of Li Wa: Study and Critical Edition of a Chinese Story from the Ninth Century* (Oxford University, 1983).
- ⑧ 『譯注』『温公續詩話』(何文煥『歷代詩話』、臺北: 藝文印書館、一九七一年、一六五頁)。原文の「古人」は『詩經』の作者たちを指すが、ここではより一般化して引用してある。